

社会生活に困難を有する 子ども・若者セミナー

第4回 切れない漏らさない支援で エンパワメント

～すべての子どもと若者が
支えられながら自ら歩めるために～

静岡大学 荻野達史

自己紹介

- 専門分野：社会学（教育社会学）
 - 「ひきこもり」研究
 - 青年期移行問題／若者支援論
 - 支援現場でのフィールドワーク
 - 参与観察
 - 当事者（本人、親）へのインタビュー
 - スタッフ、医療関係者などへのインタビュー
 - メンタルヘルスの社会学
 - 産業精神保健（職場のメンタルヘルス）
- 静岡での地域活動
 - ひきこもり支援（静岡のNPO法人）
 - 学校関連調査（県教組教育研究所）
 - 高校SSW導入モデル事業（県教委）



本日の流れ

1. 導入

＊これまでのセミナーを踏まえて

2. 子ども・若者が困難に陥るメカニズム

＊社会的排除／包摂、子どもの貧困の議論から

3. 支援システムを考える

＊地域支援システムで留意すべきポイント

1. 導入

- (1) これまでのセミナーを振り返る
- (2) 読み取れる支援のポイント
- (3) この後の議論の流れ

(1) これまでのセミナーを振り返る①

- 第1回

- 社会全体での養育の必要性
- 様々な問題（いじめ、不登校、虐待、貧困）
- 子ども・若者のSOSを受け止められる体制作り
- 学校、行政、地域の各水準で
 - 近年の法制度の変化を踏まえて

(1) これまでのセミナーを振り返る②

- 第2回

- ひきこもりについての理解と支援の流れ
- 3つのステップ、家族支援の重要性
- 多様な経験と関わりを提供することで、
- 「生」への肯定のある人生への長期的視点を
 - 「自立」の柔軟な捉え方も（※第3回）

- 第3回

- 事例に基づく伴走的支援の実際
- 本人のペースを尊重しつつ、
- 繋がり（仲間）と経験値を上げる寄り添い方
 - スタッフ、家族（への支援も含めて）
- 病・障がいへの対応、他機関との連携の仕方
 - 理想としての「ベースとなる支援機関」の存在

(2) 読み取れる 子ども・若者支援のポイント

- 広がりのあること
 - 多様なニーズに対応した多様な支援メニューを
- 見守っていけること
 - ときに長期に渡る継続的で伴走型の支援を
- 自ら歩んでいけること
 - 人の助けも借りながら、自らを頼りにできるように
- まわりを整えること
 - かれらを支えられる／伸びられる環境をつくる

(3) この後の議論の流れ

- 「社会的な養育」のシステムを構築するために
 - 第1回と第2～3回とを繋げていく
- 子ども・若者が困難に陥るメカニズムについて
 - 様々なリスクやその連関・累積を総合的に捉える
 - → 2
- 地域支援システムについて再考する
 - 切れない漏らさないセーフティーネット
 - 臨床的な要諦を押さえた支援になること
 - → 3

2. 社会的排除／包摂の議論から

- (1) その定義：問題と目標
- (2) 排除のプロセスの概観、リスク要因の総体的連関図
- (3) 個々のリスク要因間の連関を確認

(1) 社会的排除の定義と具体例

内閣府・若年者に関する調査チーム報告書から

- **社会的排除とは**
 - 物質的・金銭的欠如のみならず、居住、教育、保健、社会サービス、就労などの多次元の領域において個人が排除され、社会的交流や社会参加さえも阻まれ、徐々に社会の周縁に追いやられていくことを指す。
 - 社会的排除の状況に陥ることは、将来の展望や選択肢を剥奪されることであり、最悪の場合は、生きることそのものから排除される可能性もある。
- **典型的な具体例としての調査対象**
 - ①高校中退者②ホームレス③非正規就労者④生活保護受給者⑤シングル・マザー⑥自殺者⑦薬物・アルコール依存

「社会的排除」概念の特性

- 1990年代のヨーロッパでの議論から
 - 社会的不平等の拡大への警鐘・貧困研究の蓄積
- 貧困だけを問題にしない視点
 - 問題のある生活とはお金がないというだけではない！
- 貧困に至る多様なリスク要因に目を向ける
 - 教育程度、健康状態・障害の有無、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティ、世帯状況、社会関係、地域環境etc
- 排除状態に陥っていく〈プロセス〉に注目
 - リスク要因間の関連性・複合性に注目
- 対照概念としての「社会的包摂」
 - 社会的排除の解消された目標状態＝政策理念

社会的に包摂された状態とは

- 幾つかの要件
 - 一定の経済的水準を満たしていること
 - なんらかの社会的交流に参加していること
 - なんらかの社会的な役割をもつこと
 - 周囲からの承認を通して自尊心を持ちうること
- 「包摂」を実現するための基本的な発想
 - 「現金給付」のみでは問題は解決しないと考える
 - 多様なリスクへ包括的かつ効果的に介入する必要
 - 政策目標を「就労」に一元化するか否かは論争的
 - たとえば、あらゆる仕事上記4要素を全て満たすか？

(2) 社会的排除のプロセスについて

内閣府研究班の53ケース研究より（図中の数字は該当ケース数）

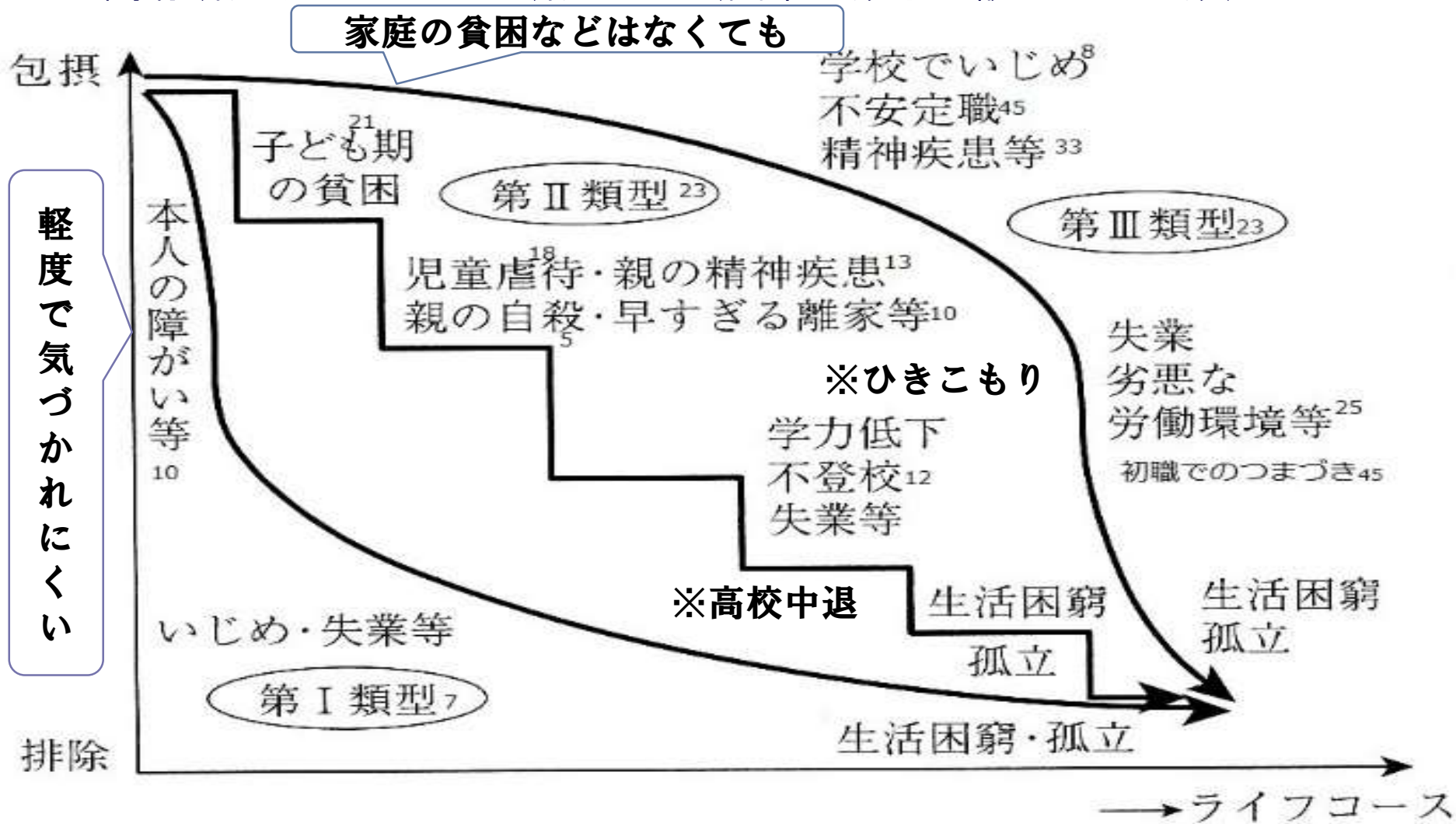


図3 社会的排除のプロセス

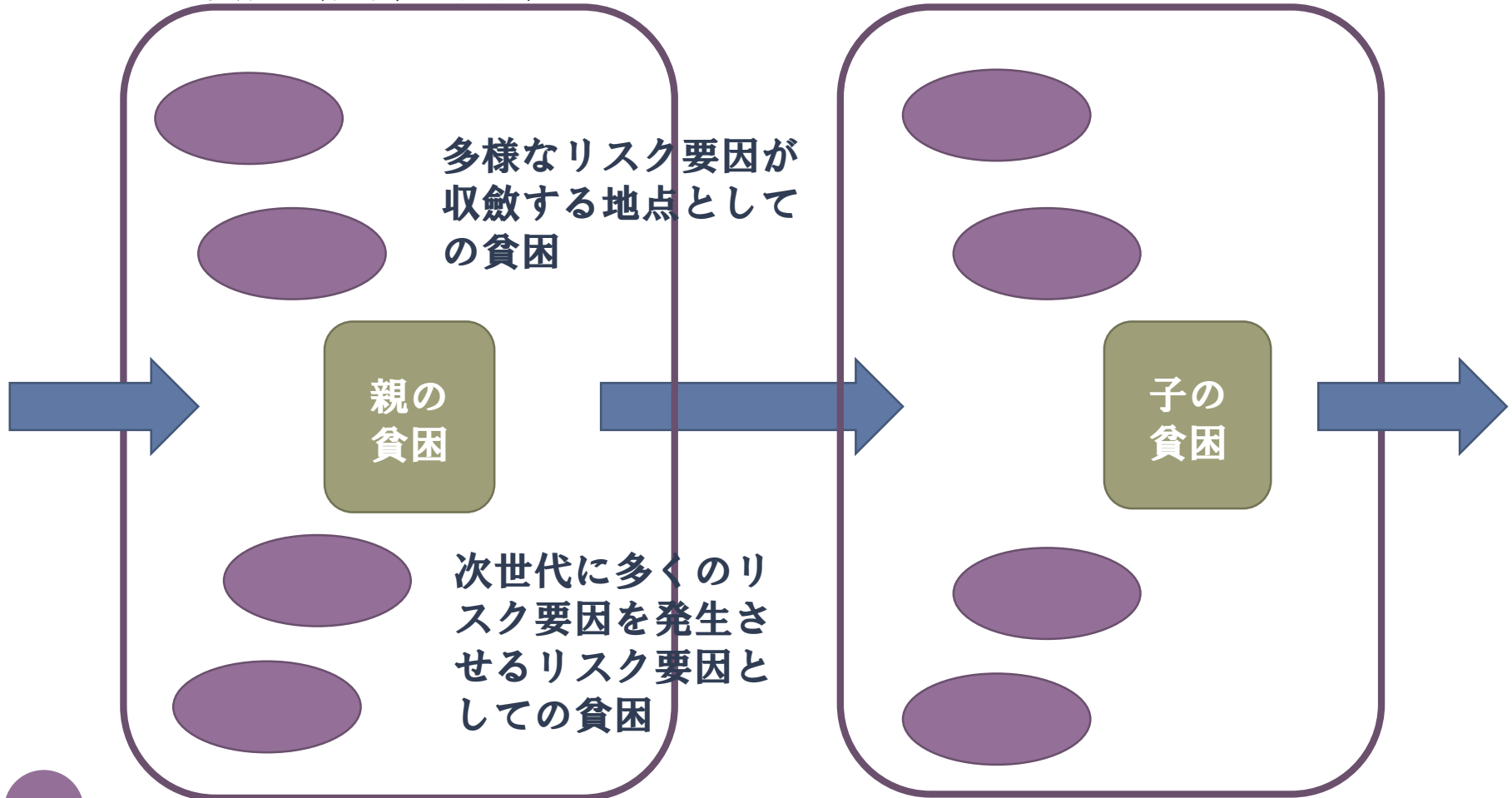
（出所）社会的排除リスク調査チーム（2012）

社会的排除と貧困との関係図

～貧困再生産の概念図として構成～

親世代の様々な
リスク要因（社会的不利）

子世代の様々な
リスク要因

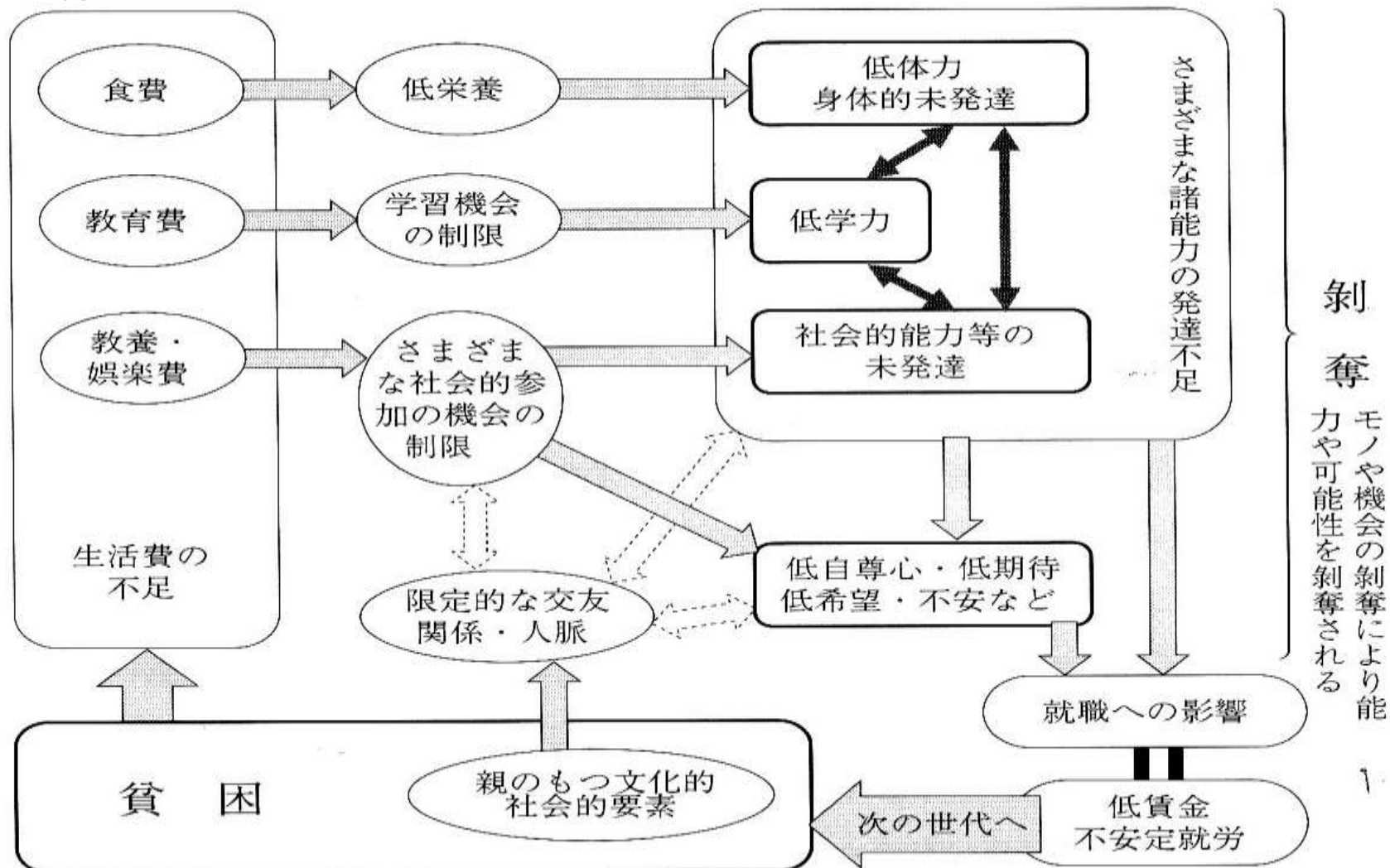


全要素と全過程が「社会的排除」の問題

子どもの貧困の議論からより詳細に見ていく 貧困のリスク関関図と階層再生産

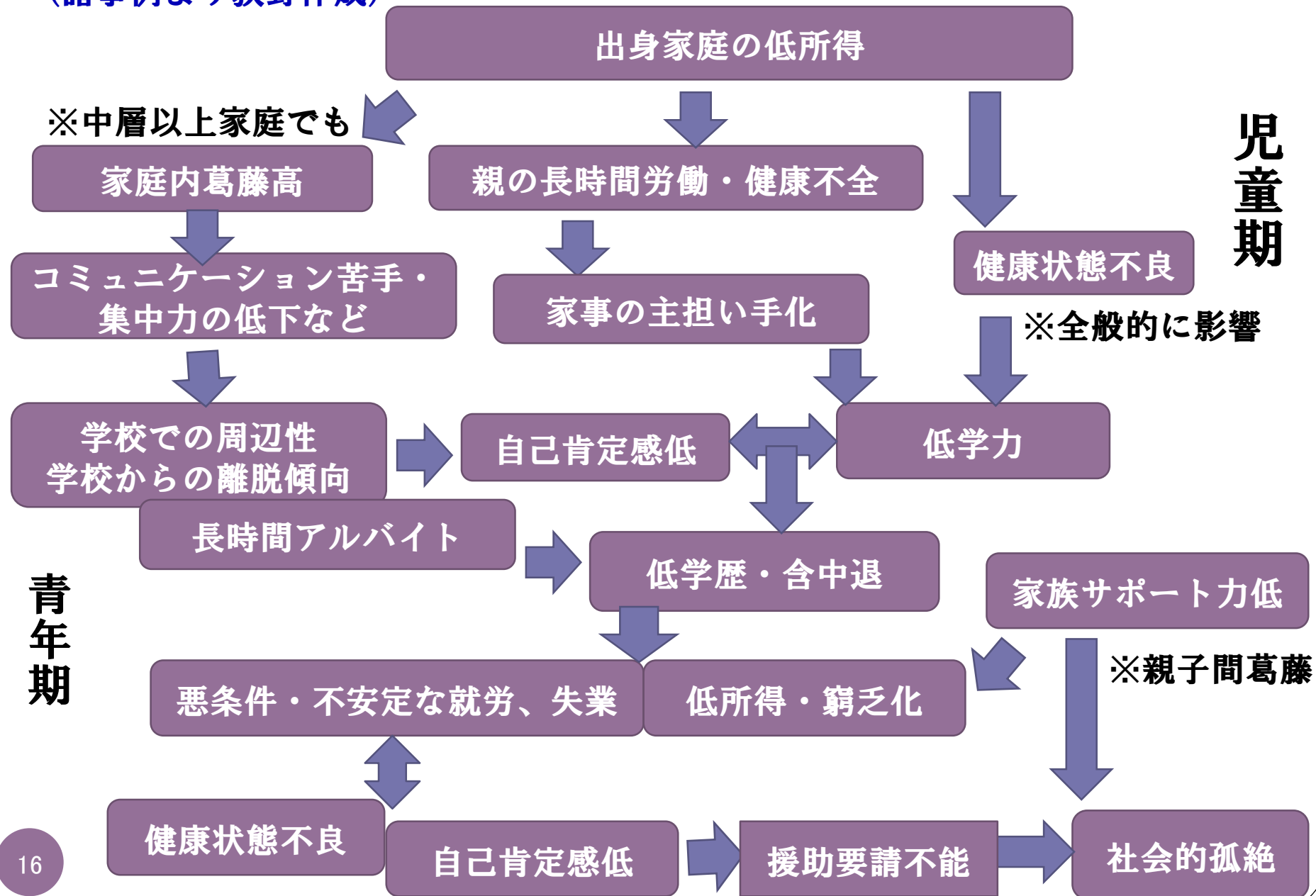
出典：山村(2015)

図 3-1 子どもの貧困の悪循環と剥奪



参考資料：子どもの貧困リスク連関図
(諸事例より荻野作成)

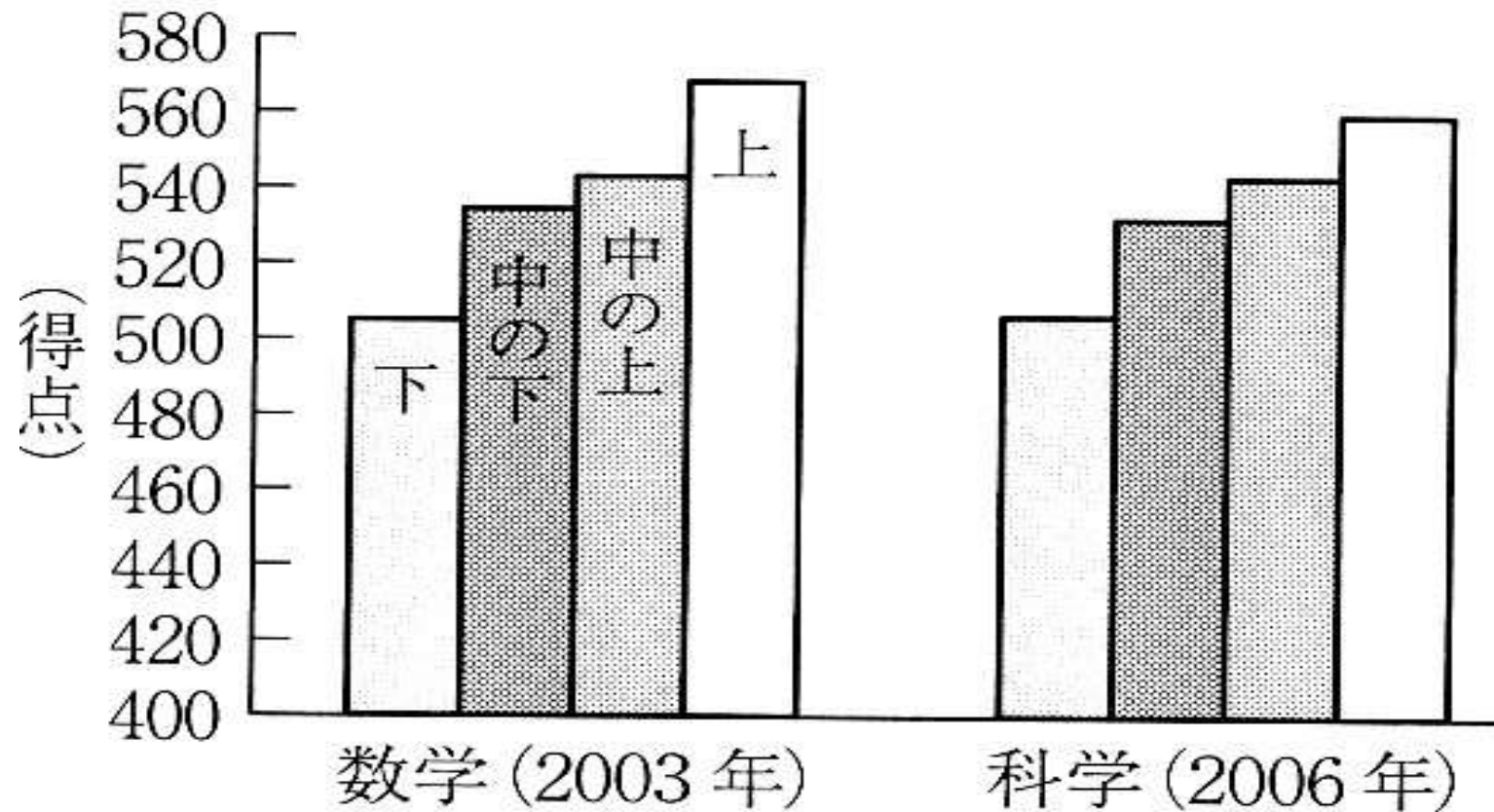
※貧困の世代間連鎖



(3) 個々のリスク連関について

①親の経済力・学歴と子の学力

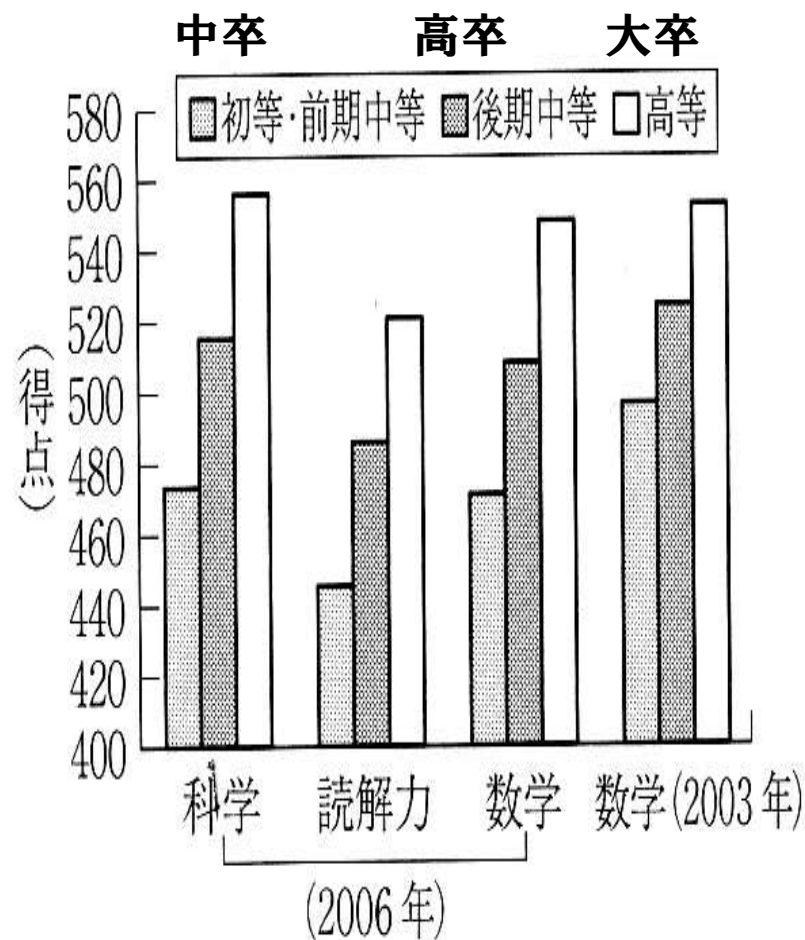
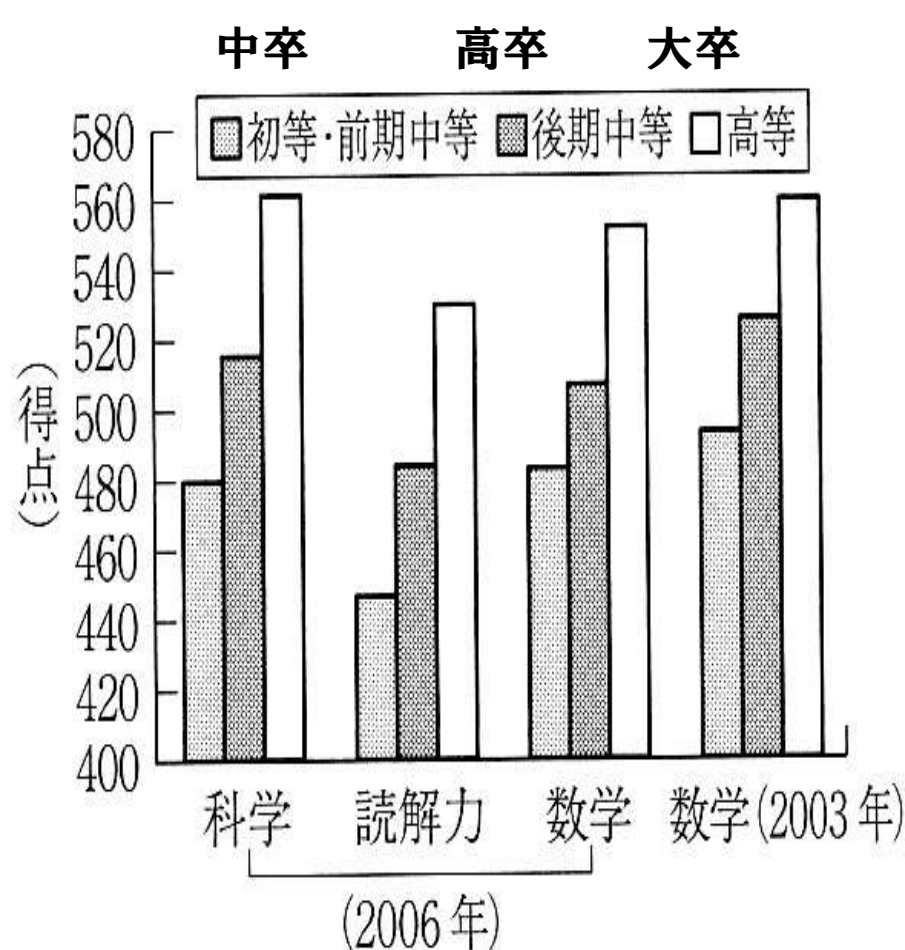
(PISA2006調査より)



親の職業階層を4段階に分けて、各階層のPISA平均得点をグラフに表したもの (出典：阿部2008)

補足資料（出典は前スライドと同じ）

左：父学歴と子学力、右：母学歴と…



家庭の経済力と学力

高校単位でみた場合 出典：青砥2009

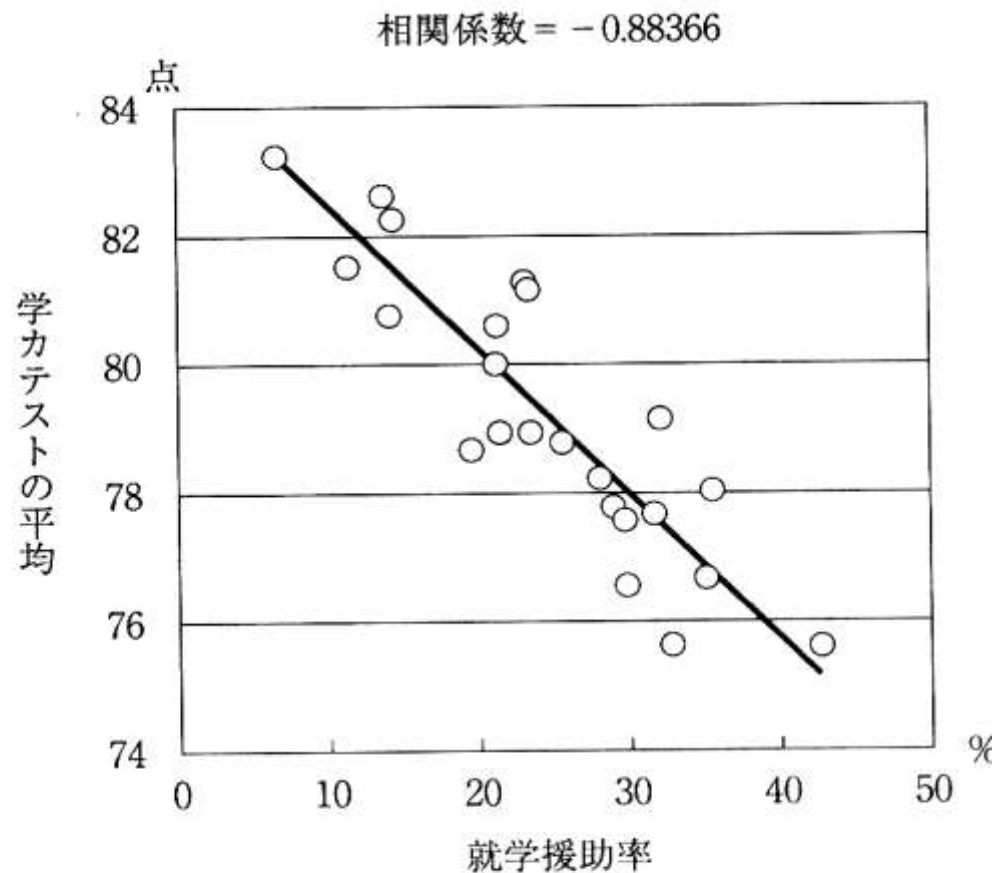


図18 就学援助率と学カテストの相関

注：○が個別の学校の数値を表す。

東京都教育委員会「平成16年度児童・生徒の学力向上を図るための調査」

なぜ学力が低くなるのか？

- 様々な要因が指摘されている
 - 金銭的な教育投資の少なさ
 - たとえば幼少期からの絵本・教材的なもの
 - 塾などの学外教育機関
 - 親の直接的な勉強への関与の少なさ
 - 宿題を見るなど勉強を親が教えること
 - 学力や学歴に対する関心の低さ
 - 子の学校生活自体への関心
 - 高校以降の学歴獲得への関心
 - 家庭生活の不安定性が与える影響
 - 親の子への関わりの希薄さ
 - 夫婦不和などの家庭内葛藤の強さ
 - これらが与える精神的影響

(補足) 家庭の経済力と高校中退

高校ランクと減免率・中退者数 青砥(2009)

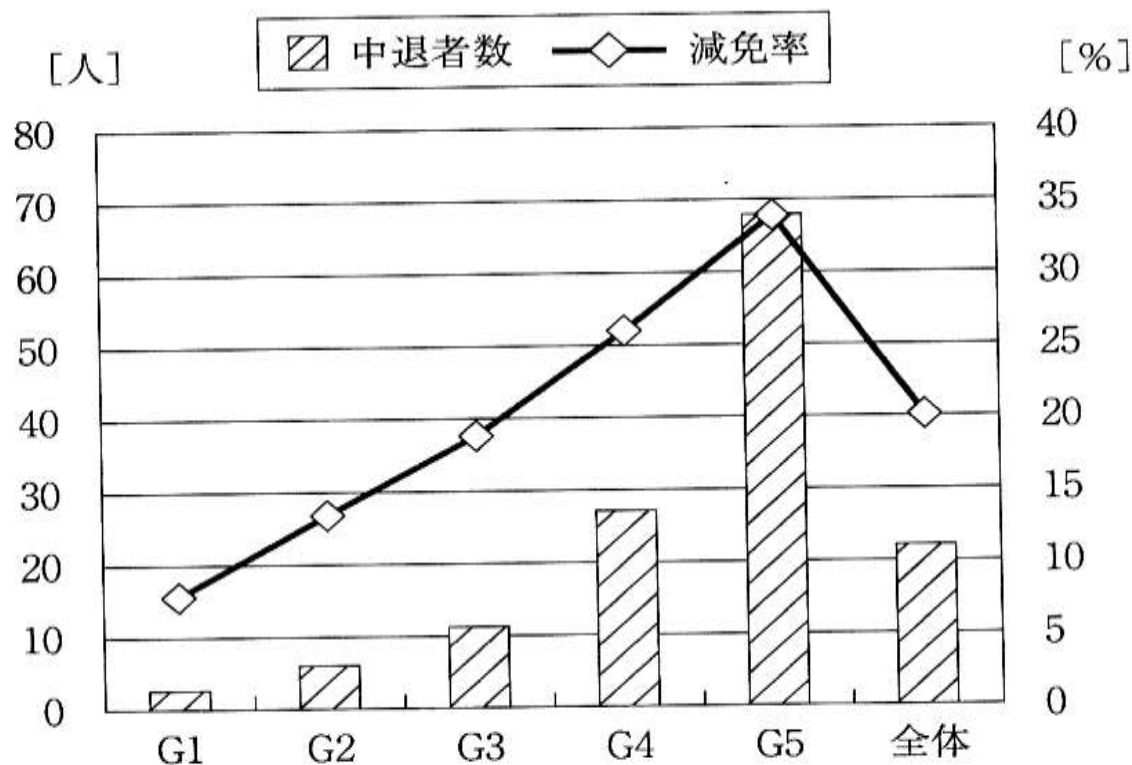


図12 大阪府立高校の中退率と減免率

2007年度の大阪府教育委員会の高校教育指導課及び財務課の資料から作成

理由は？

生活費のためのアルバイトが過重 (e.g. 睡眠不足を招くなど) といったことも多い。

なかには、バイト先の「賄い飯」のために学校に行けないというパターンも

(竹本他2016)

※高校を成績のレベルで5段階に分けたもの G1が上位校

②経済力と健康について

- 社会階層と健康との関係について
 - 成人についての社会疫学の研究蓄積より明確に
 - e.g.近藤克則2010『健康格差社会を生き抜く』朝日新書
 - 児童期の健康と家庭の経済状況との関わりも注目
- 例) 朝食摂取頻度と経済状況 (村山2016より)

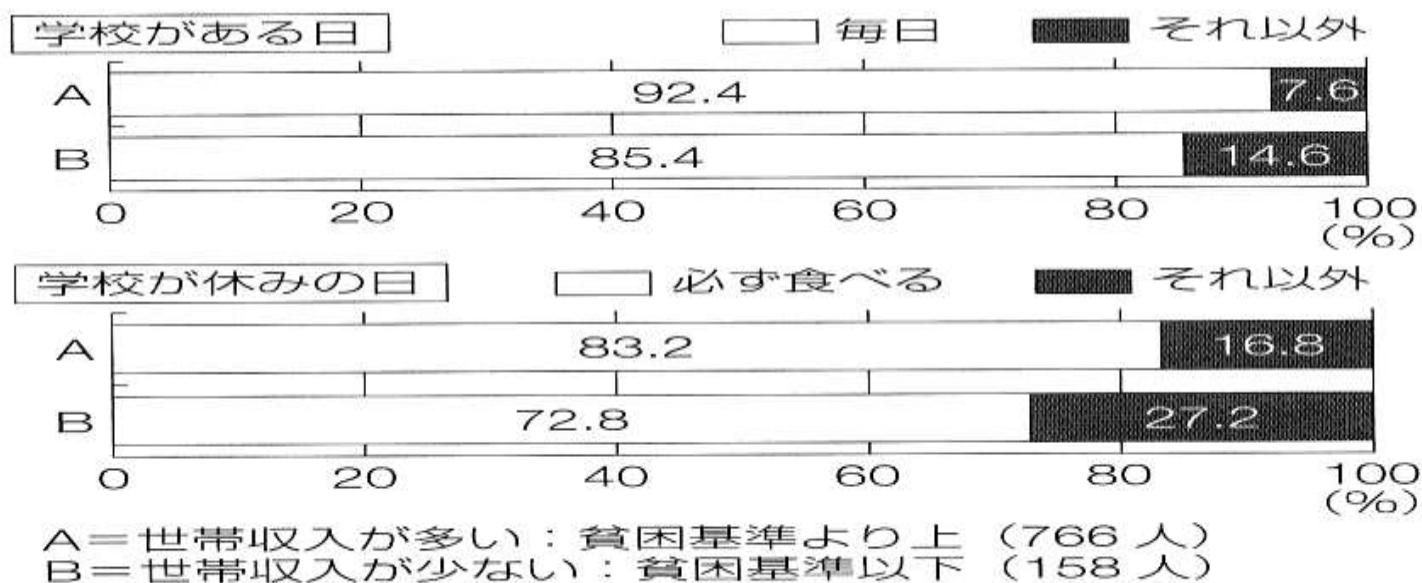


図 1 世帯収入と児童の朝食摂取頻度

経済水準と食品種別接触頻度



図 2 世帯収入と児童の家での食品摂取頻度

出典：村山 2016

貧困と食生活の関係

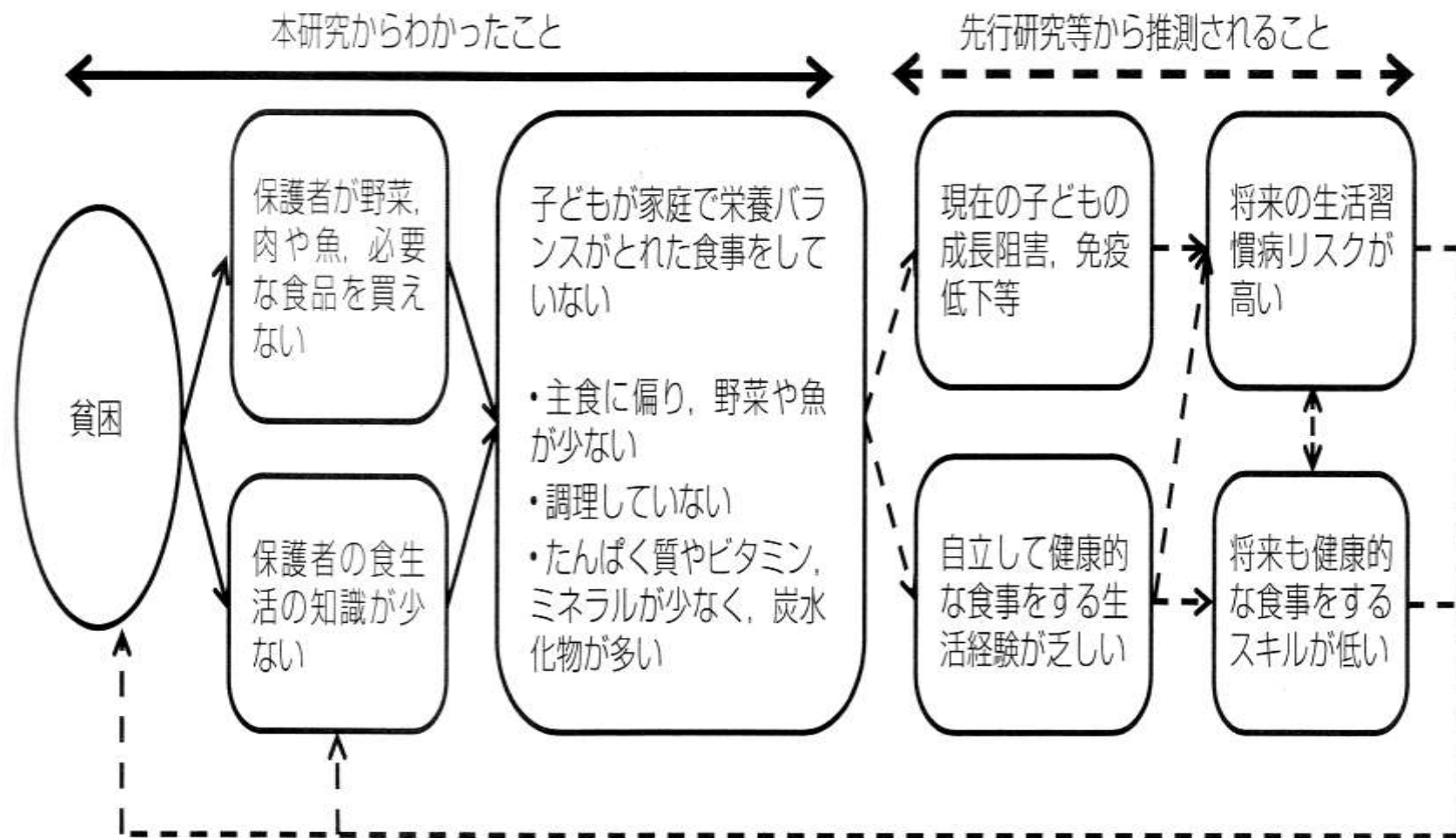


図6 子どもの貧困と食生活およびその連鎖の可能性

病院にかかるか？－ 1

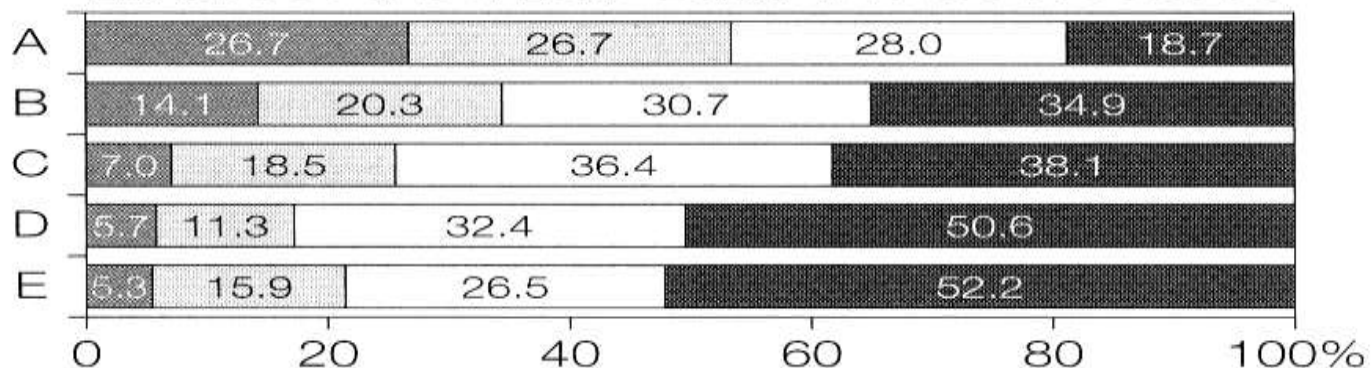
- 医療費の問題

- 一定年齢まで全学免除であっても、いったん窓口で全学で支払必要がある場合
- 一定額の必要がある場合
- 自治体の援助年齢を超えてしまっている場合

- 治療代のために病院を我慢する傾向（高校調査）

生活水準について A：生活に困っている～E：とてもゆとりあり

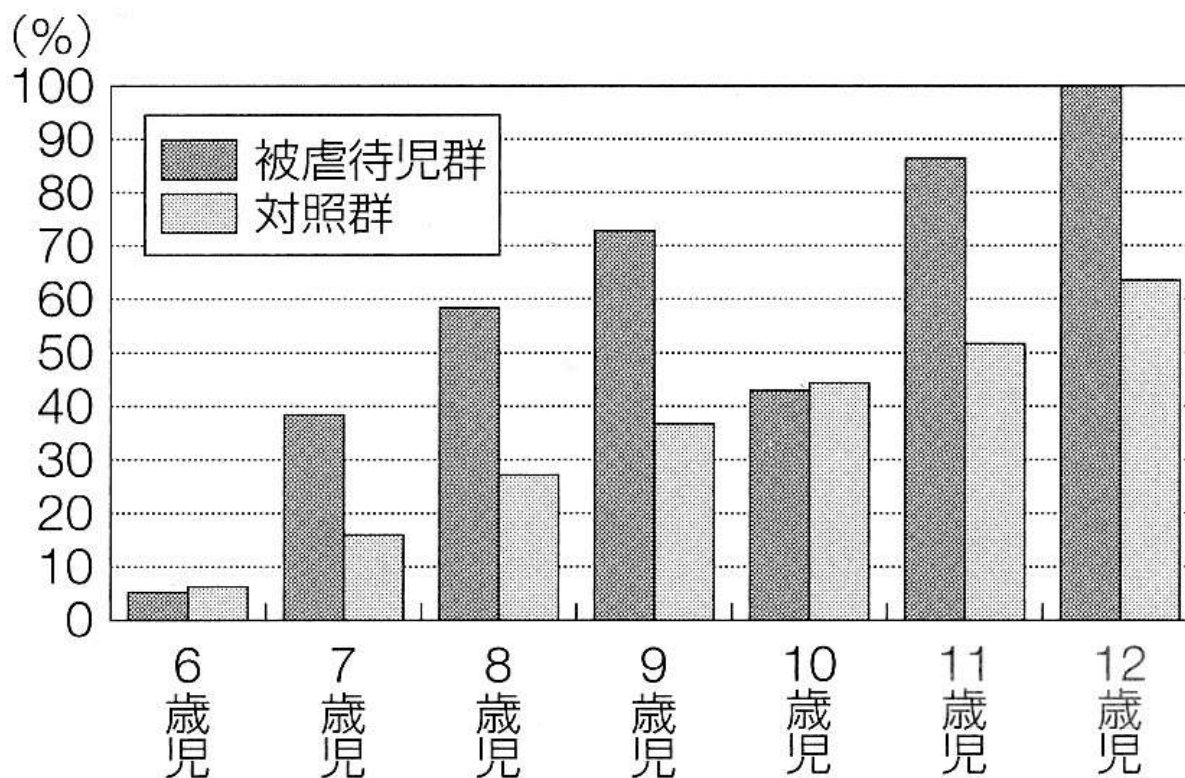
治療代がかかるので、カゼや歯が痛いとき病院に行くのをがまんすることがある



とてもあてはまる／まああてはまる／あまりあてはまらない／まったくあてはまらない

病院にかかれるか？－2

- 養育態度との関係



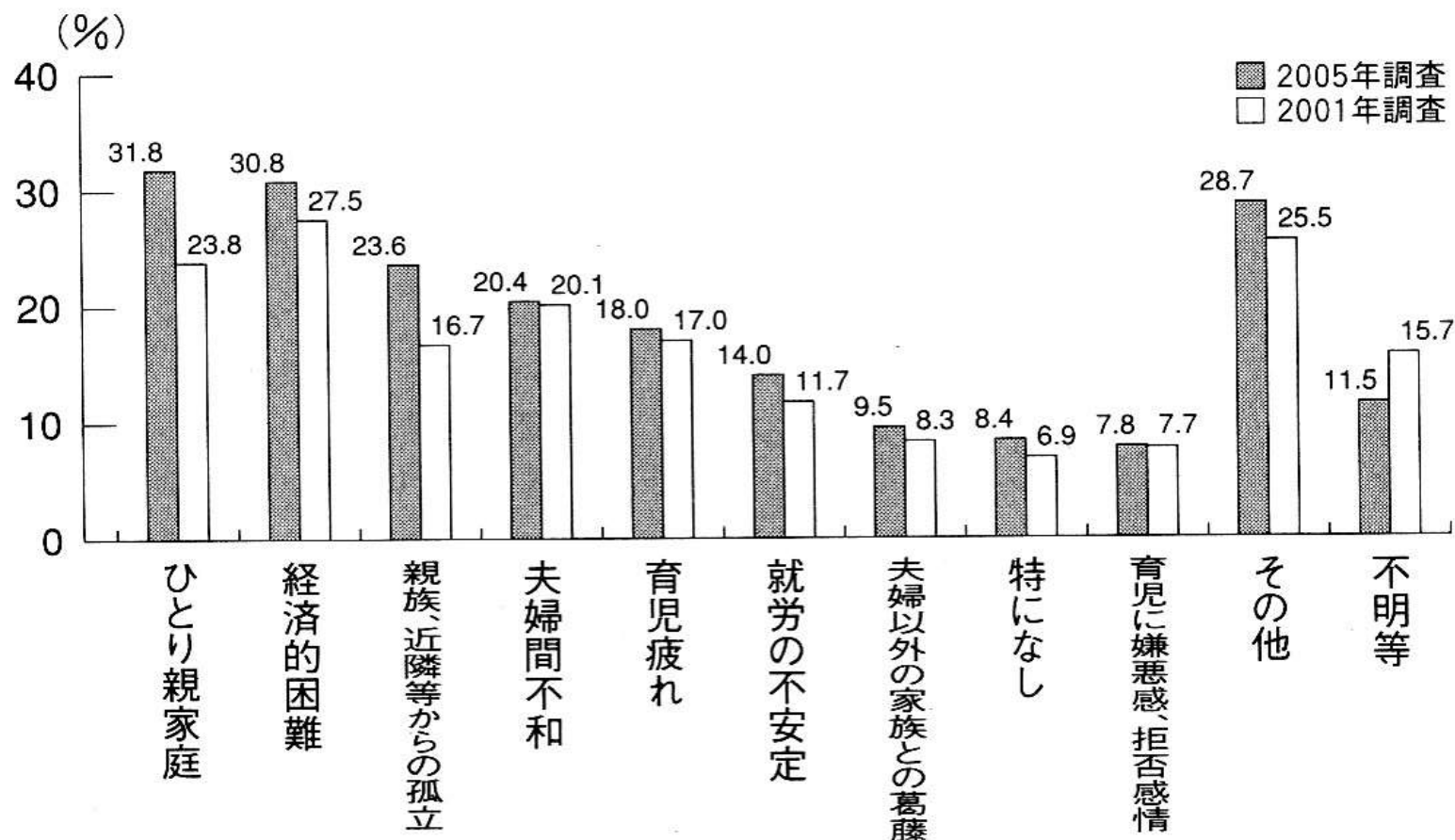
出典：渡部
2016

図 3 被虐待児童の永久歯齲蝕歯所有率

(東京都歯科医師会平成 14 年調査より)

(補論) 貧困と虐待との関係

図1 ●児童虐待につながった家庭の状況（複数回答）



精神的健康についての影響

- 被虐待児について指摘されていること
 - 「脳」と「こころ」への損傷がもたらす事柄
 - 多動性・衝動性・対人コミュニケーション障害
 - 器質的なものによるのか被虐待によるものか判別困難も
 - 成人後の不適応やパーソナリティ障害
 - e.g.小野川他2016
- 顕著な虐待はなくとも強度の慢性的ストレスも
 - 夫婦間不和など家庭内葛藤
 - 間接的な「虐待」
 - 不和・離婚の影響
 - 離婚前後の状況（対立状況、監護親の状態、子への説明、元夫婦間の関係、非監護親との関係性など）により変化
 - 学校や家庭での「逸脱行動」
 - 青年期に続く情緒的不安定性、対人恐怖、外傷後ストレス

(研究例) 夫婦間葛藤が青年期メタルヘルスに与える影響 出典：川島2008

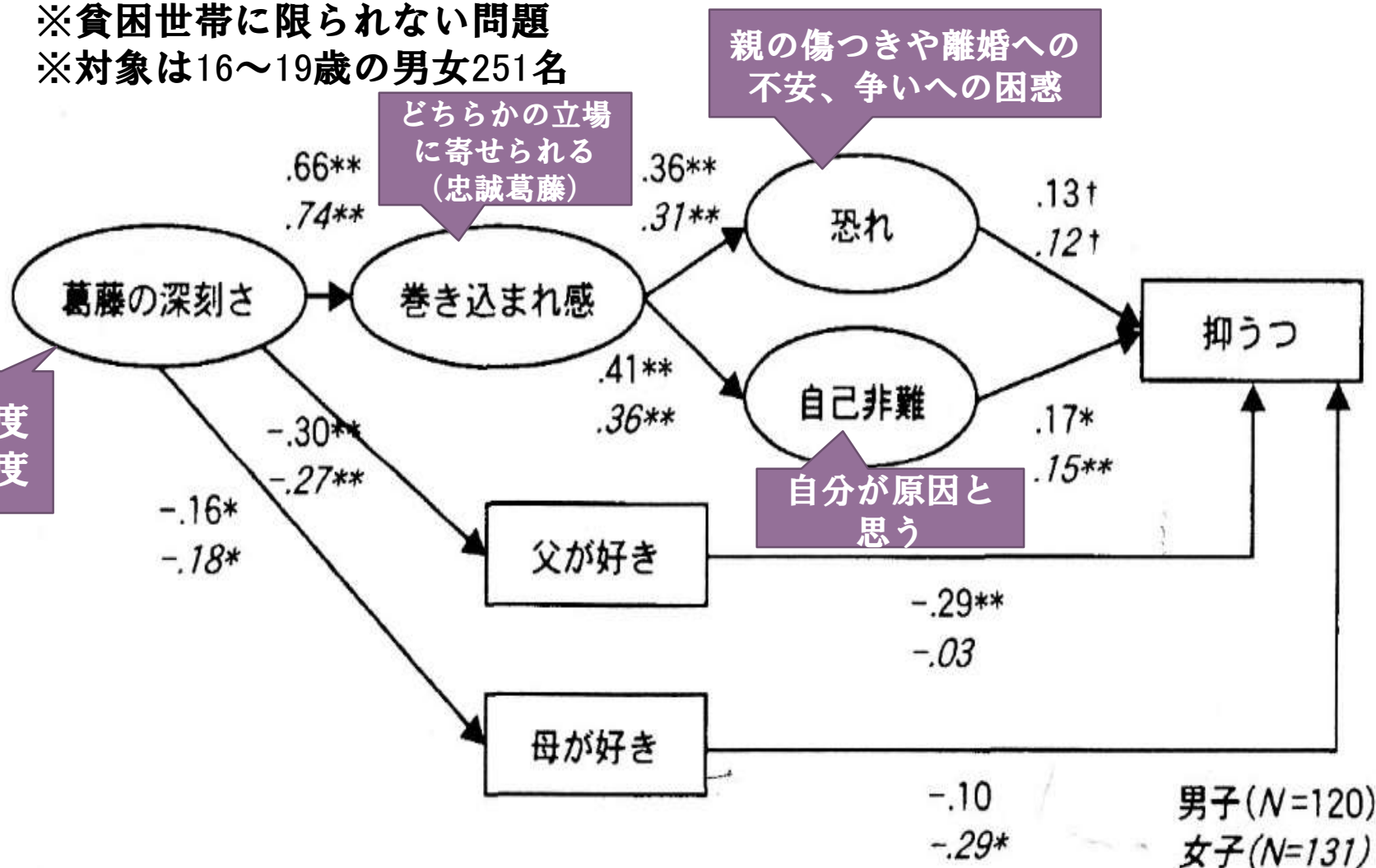
※貧困世帯に限られない問題

※対象は16～19歳の男女251名

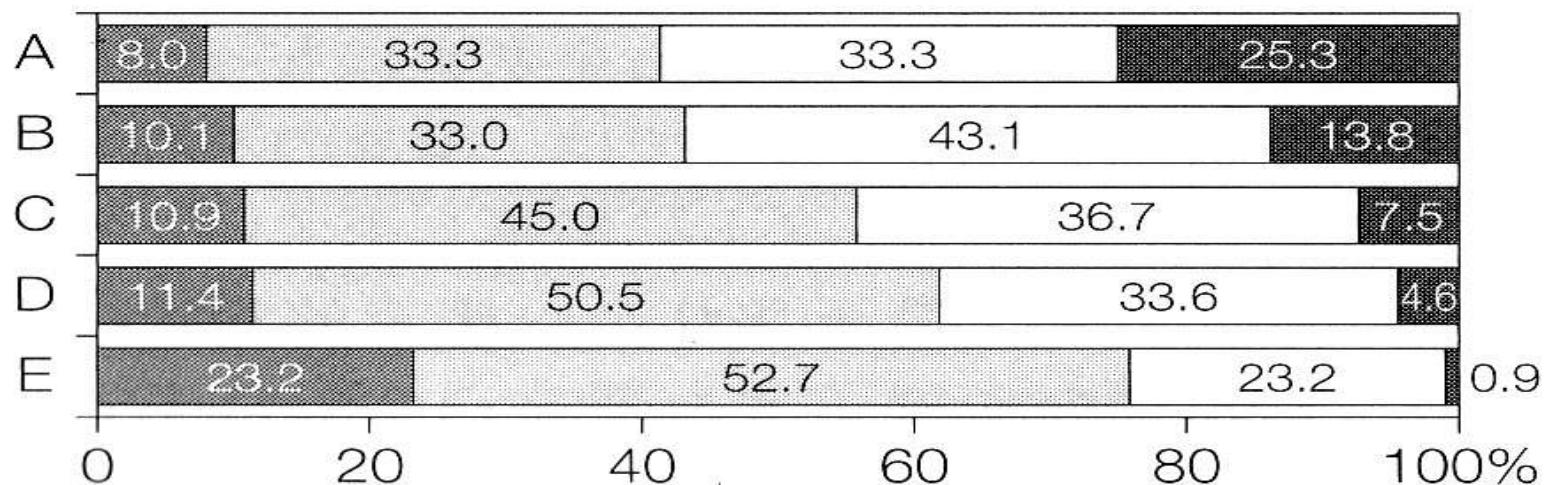
どちらかの立場
に寄せられる
(忠誠葛藤)

親の傷つきや離婚への
不安、争いへの困惑

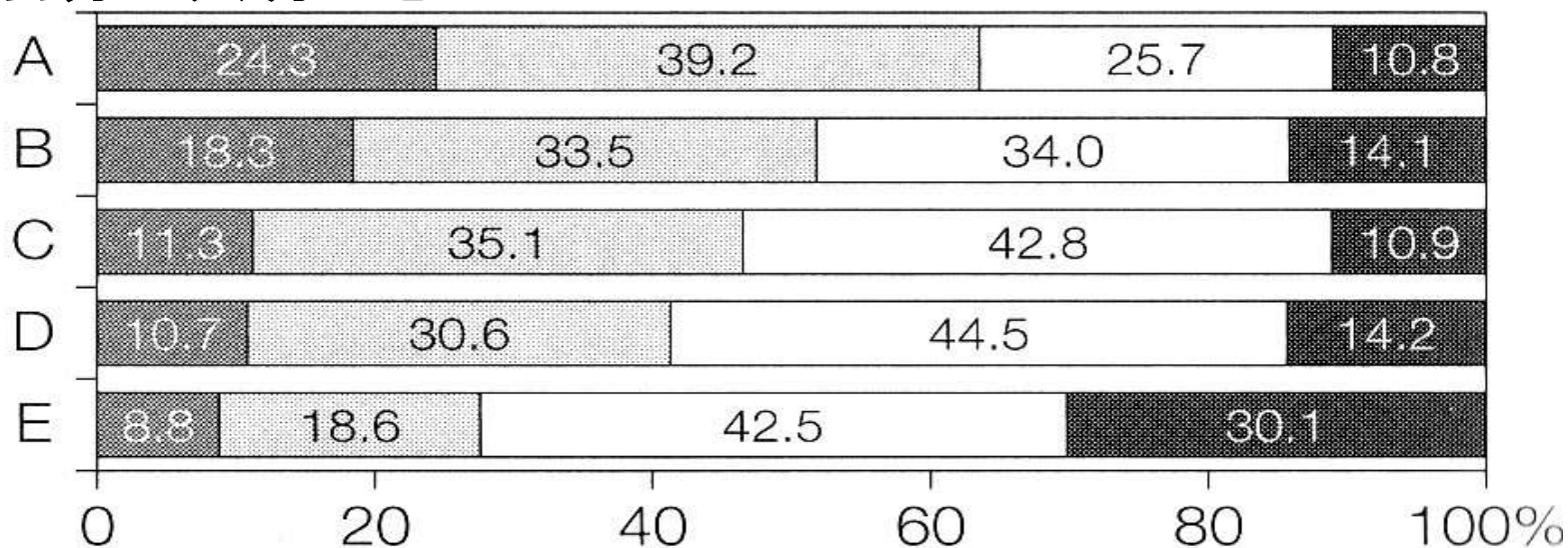
頻度
強度



自分の将来は明るいと思う



自分を大切に思えない



③ 貧困と社会経験・集団適応

- 同年代の多数派が経験していることを経験できない、あるいは手に入れられるものを持っていないということが成長上不利なことがある
- しばしば「贅沢」と思われるようなことの欠如や不足が、将来を左右する側面も
- 部活動や余暇経験、ファッションなど
 - 子どもの視点から貧困経験を探った研究より
 - e.g. 子どもの世界で「いけてない」服装が集団適応をひどく困難なものにしていること
 - 出典：リッジ2002=2010

部活動への所属について

保護世帯児童／一般世帯児童の比較

表 4-10 部活動への所属状況

	運動部	文化部	入部して 退部	一度も 入っていない	合計
被保護世帯	48.8%	21.1%	17.1%	13.0%	100.0% (N = 123)
一般世帯	60.4%	25.9%	7.7%	5.9%	100.0% (N = 2242)

$p < .000$

出典：林 2016

3. 支援システムを考える

- (1) 早期からの支援の重要性
 - 漏らさない支援、福祉的な教育の整備
- (2) 継続的支援の重要性
 - 切れない支援、地域的な情報共有と連携
- (3) 包括的な支援の重要性
 - 多様なメニュー／プログラムの必要性
 - 伴走的で、顔の見える支援者間の関係
- (4) エンパワメントの重要性
 - 援助要請力と困難耐性を高めること

(1) 早期からの支援の重要性

- 時間の経過が意味するもの
 - 悪条件がさらなる悪条件を呼び込む構造
- 家族機能（子どもへのサポート機能）の低下
 - 親における経済状況の悪化→さらなる悪化
 - 夫婦間不和・離婚→ときに親自身の精神的ダメージ
 - 養育環境の劣化：教育的無関心、虐待、子への依存…
- 子ども本人の条件の悪化
 - 心身の健康状態の悪化
 - 軽度の障がい→重度の二次障がいも
 - 学力の低化・学校での周辺化→学校からの離脱
 - 自尊感情の低下→意欲の減退・ストレス耐性の低下

早期の介入・対応のために 問題の発見・対応基地としての「学校」

- 近年の政策的動向：「福祉的教育」の整備
 - 「チーム学校」「学校のプラットフォーム化」
 - 多様な専門職の連携による対応を目指す本
 - 本人、そして家族支援へも接続
- ポイント①
 - 中長期的な視点で問題の核心に届く支援
 - たとえば、不登校の背景にあるものは？
 - 軽度の障がいや家族に関わる問題は？
- ポイント②
 - 教職員と各種専門家のコラボレーション
 - SC、そしてSSWの配置など（配置のされ方は行政的課題）
 - 学校に合わせた校内連携体制作り
 - 情報の吸い上げ方、ケース会議の開き方、外部機関との繋がり方
 - 専門職について教職員・生徒の認知を上げることも

(2) 継続的支援の重要性

- 年齢や校種で機械的に切れてしまわない必要性
 - あるハードルを越えられても
 - たとえば、学習支援を通じて高校に進学
 - 家族環境は同じ、あるいは悪化し続けることも
 - 本人の脆弱性が残っていることも
- ポイント
 - 本人が困難に直面したときに
 - 「また頼れる人」「久しぶりに相談できる人」
 - 「帰ってくることのできる場」があること
 - とくに家庭が不安定な場合、緊急避難場所のあること
 - 一度支援に繋がったら、何らかの形で繋がりを残しておく工夫が重要に

継続的支援のために 地域で「見失わない」支援体制を①

- どのような問題か
 - たとえば、高校で問題になった生徒で
 - 実は、小学生時代に兎相と関係したことも
 - そうした背景情報をSSWが集めるのが大変なことも
- ポイント①
 - 情報を管理し共有できるシステムを構築
 - (1)文書受け渡し方式
 - 例：文科省調査研究協力者会議2016『不登校児童生徒への支援に関する最終報告』における「児童生徒理解・教育支援シート」の活用
 - (2)要保護児童対策地域協議会による管理・提供
 - (3)行政内に統括調整機関を設置
 - 例：滋賀県・湖南市の「発達支援システム」

地域で「見失わない」支援体制を②

- たとえば、どのような問題か
 - 中学卒業時で「見えなくなる」という問題
 - 形の上では進路先はあるが、進路先には通わない
 - 事例化するのは20歳を越えてから
- ポイント②
 - 学校の在籍年数が終わるときの支援的配慮は重要
 - 外部支援機関と繋げる／繋がれるための取り組み
 - ひきこもり支援機関、就労支援機関などと連携
 - 支援機関からの宣伝、個別の情報提供
 - あるいは、高校における「出張所」の設置の試みも参考に

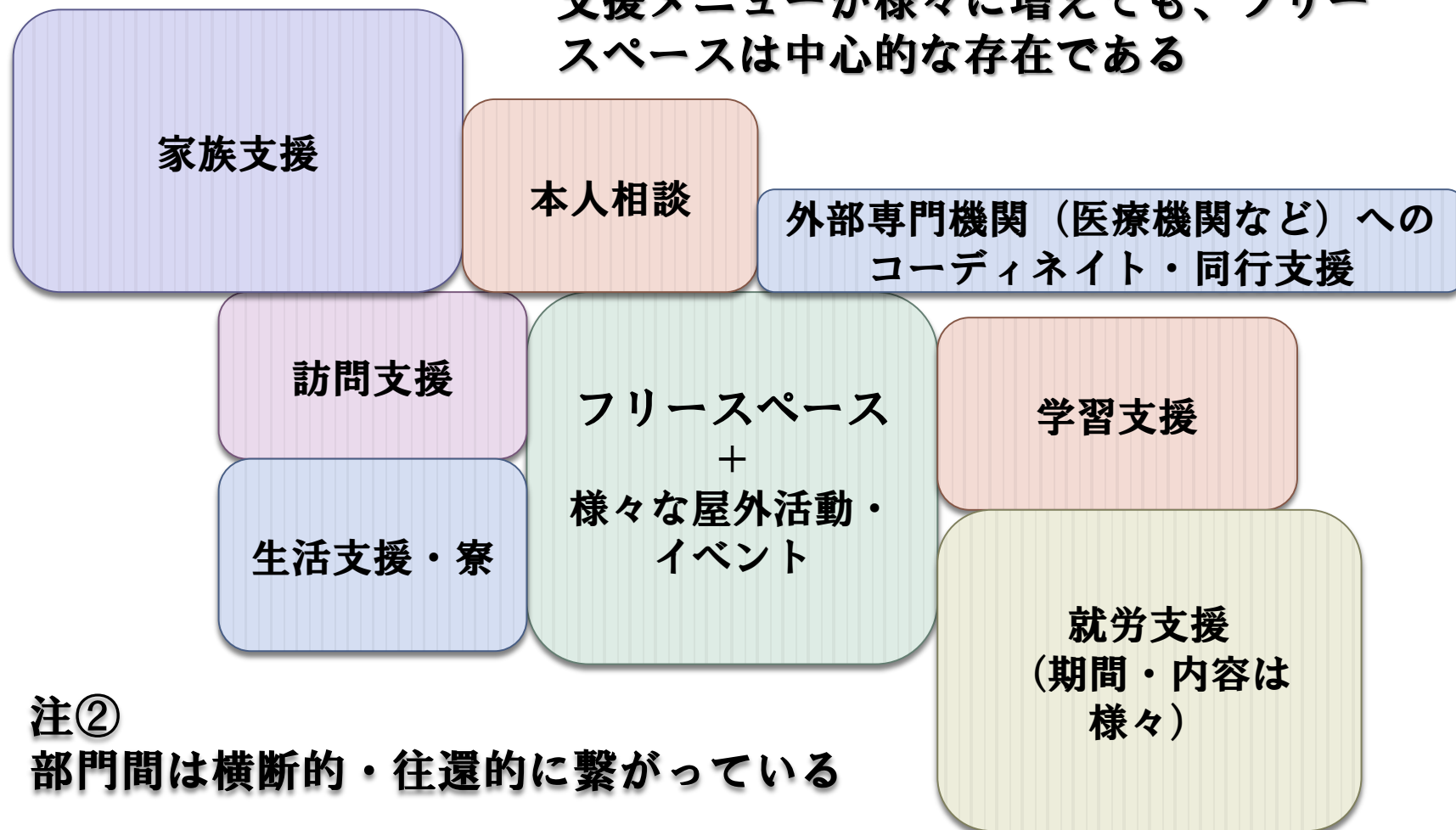
(3) 包括的な支援の重要性

- ひきこもり支援、若年者就労支援の蓄積から
 - 個別相談、居場所
 - 社会的経験値を高める各種イベント
 - 生活支援（寮での共同生活体験）
 - 医療機関との連携
 - 家族支援、訪問支援
 - 保健・福祉機関との連携
 - キャリアカウンセリング
 - 就職・就労に関わる社会的スキル
 - 就活支援（履歴書の書き方、面接対応など）
 - 各種就労体験、職場訓練
 - 利用者間の交流（居場所的取り組み）
 - ジョブコーチ、就職後のフォローアップ …などなど！
- この多様性・包括性はなぜか？
 - 回復状態や発達段階、年齢に応じた支援が必要
 - 本人の特性や固有の困難に応じた支援が必要
 - （例）わたげの支援メニューとその配置（次スライド）

わたげの支援メニューとその配置図

注①

支援メニューが様々に増えても、フリースペースは中心的な存在である



注②

部門間は横断的・往還的に繋がっている

多様なメニューが配置され その中で求められる幾つかのポイント

- ①当人やその環境のもつ問題を丁寧に検討する
 - 本人や家族の「受容」も大切にしながらニーズを見極める
- ②「自立」については柔軟な考え方も必要
 - 各種制度や資源を利用し、自ら生活を組み立てられることの重要性
- ③スモール・ステップを大切に
 - 「形」ばかりを追わない、着実な歩みを
- ④各種支援メニューの間は往還的に
 - e.g.居場所と就労・学習支援との間
- ⑤組織間の繋ぎは支援者間の顔の見える関係で
 - 「～へ行ってみて」ではなく、「～の〇〇さんなら相談に乗ってくれよ」と言えるように
- ⑥一貫してよき相談役となる伴走者がいることが理想的
 - 一機関が多様なメニューを持つ場合
 - そうでない場合も（こそ）伴走型であること

(4) エンパワメントの重要性

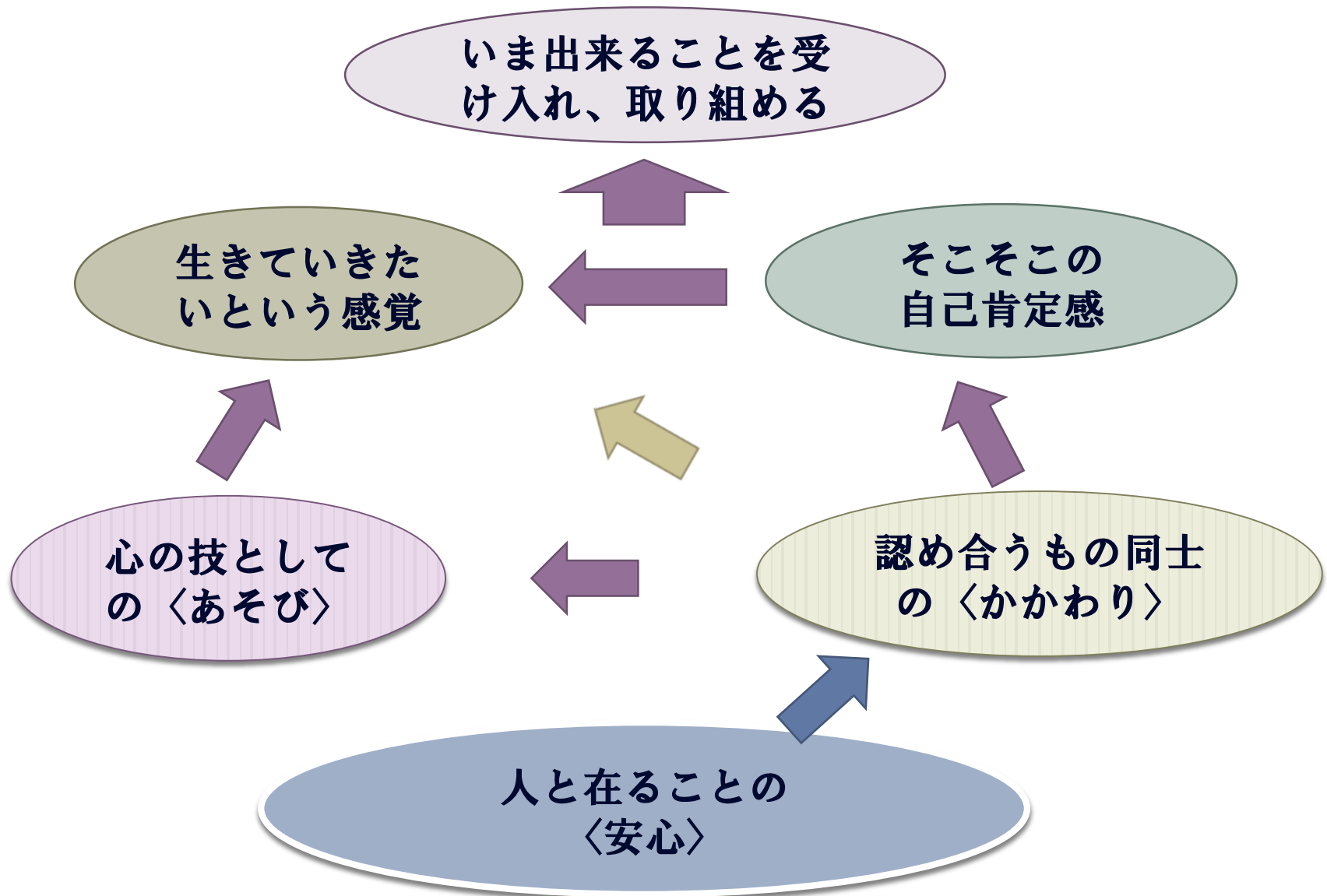
- 「環境整備」 的支援は必要だが万全ではない
 - 環境をすべて「良好」にはできない
 - 環境だけ変えても、本人がそれまで身につけた性向が社会的排除を招いてしまうことも
 - そのため、自ら歩んでいける力もやはり必要
- ポイント
 - 「本人の生きる意欲や困難に耐える力」を育む支援
 - 「教育的な福祉」が求められる部分
 - 近年の関連的研究領域でのレジリエンスへの注目
 - 逆境を乗り越える子ども＝レジリエントな子どもの存在
 - 大切なこと視点
 - 「タフさ」に期待することではない
 - 一定の「復元力」を持ちうる条件を社会的に準備・提供

「教育的な福祉」の実際

エンパワメントの方法論

- 育てるべき「力」の性質
 - 中核には「自尊感情」
 - 存在することへの自己肯定感や自己効力感
 - 第2回のわたげの第3ステップの効果（目標）として「自らの人生を考える（幸せに生きたい）」とあり
 - 「レジリエントな子ども」と良好な人間関係の知見
 - 日本における事例研究とも合致する
- 基本的な支援方法
 - 支援者および他の支援利用者との良好な関係を
 - 見守られる、受容される、承認される関係
 - 存在についての肯定的感覚を育む
 - スモールステップでの成功体験
 - 小さな出来ることを積み重ねる
 - それが支援者や周囲の人々に認められる

(一例) 居場所の中核的な機能について 「自己肯定感の底上げ」の条件とその意味



（補足資料）居場所の各種機能

機能①「行ける場所／居られる場所」の保障機能

- ◆「家から出ること」への支援には誘う「場」が必要

機能②「自尊感情の底上げ」機能

- ◆自分についての認識（関わり方）をめぐる問題
- ◆生き方イメージの柔軟化などを伴う

機能③「社会的スキルの涵養」機能

機能④「母港」機能

- ◆次のステップへ進み、ときには戻ってくるところ

機能⑤「アセスメント空間」機能

- ◆その人になにが必要であるのか見極めていく場

レジリエンスを高める支援の場は多様でありうる

- 決して「居場所」だけのことなく
 - 個人相談（カウンセリング）、各種イベント、学習支援、就労支援（キャリアカウンセリング、就労体験）など
- ポイント①そこが“包摂的”であること
 - 話を聞いてくれる、信頼できる大人がいる
 - 見守り、適度に期待してくれる人がある
 - 友達的な関係のなかで認められる
 - ときに必要とされていると思える
 - 自分もやってみたらできたと思える
- ポイント②この関係を通して各種サポートを提供
 - それが必要な場合は医療的なサポートなど
 - ときに親子間の調整
 - 生活・進学などで利用出来る制度についての情報など

参考文献①

- 青砥恭2009『ドキュメント 高校中退』ちくま新書
- 青砥恭2015『若者の貧困・居場所・セカンドチャンス』太郎次郎社エディタス
- 浅井春夫2008『子どもの貧困』明石書店
- 阿部彩2008『子どもの貧困』岩波新書
- 阿部彩2014『子どもの貧困Ⅱ』岩波新書
- フレイザー, マーク.W 2004=2009『子どものリスクとレジリエンス』ミネルヴァ書房
- 林明子2016『生活保護世帯の子どものライフストーリー』勁草書房
- 樋口明彦2004「現代社会における社会的排除のメカニズム」『社会学評論』55(1)
- 川島亜紀子他2008「両親の夫婦間葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連」『教育心理学研究』56
- 『公衆衛生』80(7) 2016 特集「子どもの貧困と健康」(スライドで示した大澤・松本、村山、小野川他、渡部の論文が所収されている)

参考文献②

- 埋橋孝文・矢野裕俊編著2015『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅠ』ミネルヴァ書房（スライドで示した山村りつ、田中聡子の論文が所収されている）
- 宮本みち子編著2015『すべての若者が生きられる未来を』岩波書店
- 内閣府・社会的排除リスク調査チーム報告書『社会的排除にいたるプロセス：若年ケース・スタディから見る排除の過程』
- 荻野達史他編著2008『ひきこもりへの社会学的アプローチ』ミネルヴァ書房
- 荻野達史2013『ひきこもり もう一度、人を好きになる』明石書店
- 荻野達史（近刊）「ひきこもりの予防・教育的アプローチ」「ひきこもりの心理支援：心理職のためのガイドライン」金剛出版
- 社会的排除リスク調査チーム2012『社会的排除にいたるプロセス：若年ケース・スタディから見る排除の過程』（web上より入手可能）
- 菅原ますみ編著2013『子ども期の養育環境とQOL』金子書房
- 竹本他2016「多様な困難を抱える高校における特別支援教育の課題」『東京学芸大学紀要．総合教育科学系』67(2)
- 棚瀬一代2007『離婚と子ども』創元社
- テス・リッジ2002=2010『子どもの貧困と社会的排除』桜井書店